佳作

骨折して感じたこと

茨城県　古河市立西牛谷小学校五年　薄　聡真

二〇二三年十月十日、ぼくは骨折した。体育のとび箱で八だんをとぼうとした時、足がひっかかって右ひじから落ちた。

「転んだ時の百倍はいたい。これはヤバイかも。」

右うでがはれてきて曲がらなくなってぼくは病院の先生に聞いた。

「今週の試合、ぼく出られますか。」

先生は言った。

「今週は残念だね。手術をして三カ月は野球はできない。」

四年生だったぼくはレギュラーになったばかりでやっと試合に出られる、活やくしようとはりきっていたのに。

手術の後は大変だった。左手では食事が思うように出来ず、字も書けなかった。右手が使えないと生活のすべてが不便だった。

手術から十日後、お母さんと学校に行くとクラスメイトがすぐ来てランドセルを持ってくれた。給食の時間は机まで給食を運んでくれた。次の授業のじゅんびも手伝ってくれた。ぼくが右手を使えない一カ月の間、クラスのみんなが声をかけてくれて助けてくれた。ふだん話さない子やちょっとイジワルで苦手だと思っていた子もだ。

クラスみんなのやさしさや思いやりがぼくはうれしかったし感動した。

野球のチームメイトも心配してくれたり、

「がんばれ、まってるぞ。」

と応えんしてくれた。試合に出れなくて落ちこんだ気持ちもリハビリのいたくて大変なつらさもいろんな人の応えんでがんばれたと思う。

「リハビリしっかりやって早く野球の試合に出られるようにがんばろうな。」

病院の先生がいった。ぼくはひじの曲げのばしとマッサージをいたみにたえながら毎日がんばった。以前と同じように動かせるようになるのには半年たった四月だった。

四月末の大事な試合、負けてしまった。練習期間が短く、思うようなプレーが出来なかった事がぼくはくやしかった。

六月の大事な試合、ぼくのチームは勝った。四月の試合で負けたチームにだ。チームのみんな大よろこびだった。みんな笑顔で大人はうれしなきしてた。いつもきびしいかんとくやコーチが泣いているのは初めてみた。

だからリハビリや野球の練習をがんばって勝ててぼくは本当にうれしかった。

骨折していろんな経験をしたからこそこんなに感動したのかもしれない。

十月、県大会だ。

県大会では一点をとるために常に考えて動くことが目標だ。